

ジェンダー・トラック

—性役割観に基づく進路分化メカニズムに関する考察—

中西 祐子

1. 問題の所在

青少年の進路選択は、教育社会学が古くから扱ってきたテーマである。しかし、女子の進路分化を扱った研究は数少ない。その原因の一つは、学校が長い間メリトクラティックな選抜機関と見なされてきたところにある。「学校＝メリトクラティックな選抜機関」と見なした場合、生徒の進路分化はもっぱら学業成績によって説明される。しかし、メリトクラティックな（＝学業成績に基づく）選抜のみでは女子の進路分化を説明することはできない。なぜなら、女子の進路選択には非メリトクラティックな要因が関係するからである。女子の進路は「妻役割・母役割」と「職業的役割」の葛藤をくぐりぬけた結果生まれてくる。これまで女子の役割葛藤とその結果の進路選択は、本人の主体的な選択であるとされ、そこに一定のメカニズムが存在すること、さらに学校がその中で特定の役割を果たしていることが問われたことはなかった。

本稿では、学校がメリトクラティックな選抜機関では決してなく、非メリトクラティックな要因に基づいた選抜・配分装置でもあることを明らかにする。「妻役割・母役割」と「職業的役割」の葛藤は、女性役割をどう捉えるかの問題であり、個々人の内面化している性役割観の相違は、女子の性内 (intra gender) 分化を引き起こす。すなわち、性役割の社会化エージェントである学校は、同時に性役割観に基づいて生徒を選抜・配分する装置なのである。

本稿の目的は、①学校における性役割の社会化過程には、性役割観に基づく進路分化過程が伴っており、学校が性役割観に基づく選抜・配分装置であること、②性役割観に基づいて生徒が配分される方向には学校差があり、学校が性役割観に基づいて生

徒の進路選択の機会と範囲を制約するトラッキング・システムを形成していること、の二つを実証することにある。そこで、以下では、高校生を対象とした性役割観と進路展望に関する調査結果をもとに、①学校組織の伝達する知識と生徒の内面化する性役割観、進路展望がいかなる関係にあるのか、②学校組織の伝達する知識、生徒の内面化する性役割観と進路展望にいかなる学校差が見られるか、を考察する。なお、本稿では、性役割観に基づく進路選択の機会と範囲の制約（学校差）を生み出す構造を「ジェンダー・トラック」と呼ぶ。

2. 先行研究の知見と課題

これまでの進路分化研究は、学校の選抜・配分機能に着目してきた。そして、日本の高等学校が、主として学業成績に基づくトラックを形成していること、加えて、どのトラック（高校）に入るかによって生徒の卒業後の進路が大きく異なることを明らかにした。とりわけ、日本の高等学校が、生徒の卒業後の進路選択の機会と範囲を制約するトラッキング・システムを形成している（藤田 1980）という知見は、社会的資源の獲得あるいはライフコース選択に対し、進学した高校が重要な役割を果たすことを示すものであった⁽¹⁾。

成績上位校、中位校、下位校といった、いわゆる学校ランクに対応して、生徒の卒業後の進路は分化する。成績上位校には4年制大学進学者が、下位校に就職者が多いことはその典型である。また、そこには「トラックの効果（進路の矯正力）」が隠されている。例えば、石戸（1985）の研究では、高校生の大学進学アスピレーションが、生徒個人の成績よりも、在学する学校のランクすなわちトラックに規定されることが明らかになっている。このように、ある進路の選択が、後の進路にまで影響を与え、実際には可能な進路選択を不可能にしてしまうところにトラックがトラックとよばれる所以がある。

生徒がトラックにふさわしい進路へと導かれる過程には、トラックにふさわしいパーソナリティ、アスピレーションや進路展望を内面化させる社会化過程が伴っている（耳塚 1983）。進路がスムーズに分化するのはこのためである。このような社会化過程は、高校入学以前から始まっている。進学可能な高校ランクを認識した中学生は、予期的社会化のメカニズムにより、その高校のチャーターにふさわしい進路展望を形成することが知られている（荻谷 1983）。一方、明確な進路展望を持たずに高校に入学した者も、高校内部の社会化メカニズムによって徐々にトラックにふさわしい進路展望を形成するようになる。なぜなら、学校組織、学校文化、生徒文化などの社会化

環境そのものがトラックに規定されているからである（耳塚 1983）。

従来の進路分化研究は、日本の高等学校が学業成績に基づくトラッキング・システムを形成しており、生徒の進路選択の機会と範囲を制約していることを明らかにした。しかし、これらの知見も、なぜ男子と女子で異なる進路が選び取られるのかは無論のこと、なぜ妻役割・母役割といった伝統的な進路を選択する女子と、職業的役割に代表される非伝統的な進路を選択する女子が存在するのかを説明するものではなかった。すなわち、両性を対象としたはずの従来の進路分化研究は、実際には male dominant な記述をしてきたにすぎないのである。

「女子の」進路分化メカニズムが議論されるには、「ジェンダーと教育」研究の始まりを待たねばならなかった。文化的に規定された「性」であるジェンダーの視点の導入は、女子の進路決定に重要である「性役割規範」の存在を浮かび上がらせた。そして、女子独特の進路選択パターンは、生物学的要因あるいは本人や家族の主体的選択に起因するものではなく、「妻役割・母役割」といった伝統的に女子に期待されてきた役割志向を獲得する社会化過程の結果であることが示された（中山 1985）。女子の進路は、青年期に学校で強調される学業達成への志向と伝統的に女子に期待されてきた役割との葛藤（天野 1988）過程を通り抜けた結果、決定されるものなのである。

ジェンダーの視点の導入がもたらした意義は、女子の進路に「性役割観」が重要な意味を持つことを明らかにしたことにある。しかし、これらの研究も「男子に対する女子」の特徴を強調するあまり、女子の一枚岩的把握にとどまるきらいがあった。現実には、「妻役割・母役割」といった伝統的な進路を選択する女子がいる一方で、「職業的役割」という非伝統的な進路を選択する女子もいる。このような女性内分化 (intra gender) の生成メカニズムは、男性に対する女性の進路選択の特徴を強調しただけでは説明できない。

女子の性内 (intra gender) 分化を考察した研究は未だ数少なく⁽²⁾、これまでの知見も、第一に女子の分化パターンの仮説的提示にとどまっており（中山 1985, 木村 1990）、第二に家族の性役割観との関連を実証したものの、進路分化装置である学校の内部過程にまで議論が及んでいない（宮島・田中 1983）といった課題を残している。本稿では、先行研究が残した以上の課題の解決を試みる。

3. 実証研究の目的と調査対象・方法

以上の知見をふまえ、本稿では、学校の持つ女子の進路分化メカニズムを考察する。先行研究を検討し、考察にあたり次の二つのポイントを設定した。第一に、「学校は性

役割観に基づいて生徒の進路を分化させる機能を持つのではないか」。第二に、「性役割観に基づく進路分化パターンには学校差があり、性役割観に基づいて進路選択の機会と範囲を制約するある種のトラッキング・システムが形成されているのではないか」。

このような観点に基づき、高校生を対象とした質問紙調査を行った⁽³⁾。調査対象者は、大都市圏の女子校3校の3年生徒である。

対象：私立女子校2校（A高校、B高校⁽⁴⁾）、公立女子校1校（C高校）
 3年生徒、計513名⁽⁵⁾。
 （うちわけ：A高校150名、B高校186名、C高校177名）
 方法：質問紙調査（留置、集合調査）
 時期：1992年7月上旬～中旬

調査対象校選定にあたり、次の4点に留意した。第一に学業成績レベルを統制すること。これは進路分化規定要因の一つである学業成績からの影響を最小限にするためである。第二に、将来、職業的役割から伝統的な妻役割・母役割まで多様な進路選択のオプションを準備されている高校であること。結果的にはいわゆる「エリート女子校」を選択することになった。第三に、性役割観の伝達という点でそれぞれ特徴的な学校文化を持つ高校であること。学業成績に代わる進路分化要因として性役割観に着目しているためである。第四に、系列大学を持たない女子校であること。これは卒業後の進路の比較を容易にするためである。

調査対象校は全て進学校であるが、性役割観に関して異なる知識を伝達している。詳細は後述するが、A高校は最近まで女性に期待されることの少なかった職業的役割の遂行を奨励する学校であり、B高校は伝統的に女性に期待されてきた妻役割・母役割の遂行を奨励する学校である。C高校は女性役割の伝達という面では相対的にニュートラルな特徴を持つ。これはC高校が公立であることに起因しよう。

本研究の調査対象は、女子高校生全体を代表するものではない。そこには「学業成績上位校」というバイアスがかかっている。ただしそれは研究上の戦略的バイアスである。学業成績上位校を対象としたことにより、学業成績面では男子と同様のあらゆる進路を選択可能な状況におかれている女子が、「学業成績以外の要因によって」、いかに進路選択機会が狭められることになるかを明らかにすることができる。

なお、本稿ではA高校とB高校の分析を中心にを行い、C高校は比較の対象として位

置くことにする。

4. 実証研究の知見

以下では、①学校組織、②生徒の内面化する性役割観、③進路展望の順に A 高校と B 高校を比較する。その目的は、①性役割に関して学校内でいかなる知識が伝達されているか、②学校における性役割の社会化の結果、生徒はいかなる性役割観を内面化しているか、③学校内での性役割観に基づく選抜・配分の結果、生徒はいかなる進路へと導かれるか、を明らかにすることにある。本章の最後に、この三者の関係について考察する。

(1) 学校で伝達される知識～学校組織の比較分析

まず、各校で伝達される性役割観と進路に関する知識内容を捉えてみよう。学校は知識の伝達機関である。学校組織の分析枠組みを構築したキング (King, R.) の枠組みを利用し、調査校では性役割観あるいは進路に関していかなる知識が伝達されているかを分析する。分析には各校が作成した学校要覧、カリキュラム表、進学状況表を用いた。同時に、いわゆる「受験ガイド」(市販のもの) に記述された学校紹介も分析した。3校を比較したものが表1である。

キングは学校組織を把握する変数として活動変数 (activity variables)、構造変数 (structural variables)、文脈変数 (contextual variables) の三つをあげている。活動変数とは学校内で伝達される知識とその過程をいい、構造変数とは知識が構成、編成される様式をいう。そして文脈変数とは活動変数と構造変数に影響を及ぼすもので、学校の置かれた社会的文脈を示す (King, R. 1973, 耳塚 1980, 荻谷 1981)。

文脈変数は、学校の組織構造を規定するものである。従って、調査校で伝達される知識の相違を把握するためには、まず文脈変数を見る必要がある。文脈変数は、①生徒、教員や学校設備など、人的物的資源に関係するもの、②学校のステータス (財政・宗教的基盤、男女比、選抜度)、イデオロギー (校長・教師が共有する、生徒の特質や教育過程についての特有な観念・価値・信念のセット) や歴史など、資源を条件づけるもの、③学校の所在する地域の特質や教育構造、職業構造、の三つから構成される。以下では、性役割観あるいは進路に関して伝達される知識内容の相違をもたらす上で重要と考えられる、学校のイデオロギーと歴史を指標とする。さらに、マイヤー (Meyer, J. 1977) が言うところのチャーターも加えて分析する。丸山 (1981) の整理によれば、チャーターとは、ある属性を備えた人間を作り出してもよいという「免状」

表1 調査対象校データ

	A 高校	B 高校	C 高校
形態	私立 (6年制)	私立 (6年制)	公立 (3年制)
創立	1924年 (大正13年)	1875年 (明治8年)	1900年 (明治33年)
設立目的	女子教育機関の設備と振興	布教と教育慈善	-----
教育基本方針の特徴	気品と学識, 自主性を備えた女性の育成を目指す。	人間教育に重点をおき真の知性を養って正しい価値判断ができるよう指導している。	個人の自由と責任を尊重する。
生徒数	741人	561人	1488人
教員構成(専任)	50人 (女性94.0%)	50人 (女性74.0%)	58人 (女性27.6%)
入学偏差値 ※1	合格可能圏 67	合格可能圏 62	合格可能圏 68
進学状況※2	4年制大学100.0%	4年制大学91.8%	4年制大学93.7%
①学校の記載する卒業生の進路	各方面に有能な女子を送り出すことを念願としている。	卒業生の多くは堅実な中流社会層の家庭婦人として生活している。	記載なし
②受験雑誌の記載	将来の自立を意識している傾向が強い。医師, 弁護士, 国家公務員, 研究者などを希望し努力する。	良き妻, 良き母となることを理想としている。	伝統校であり, 進学実績もよい。
校風	建学の精神を受け継ぎ自主的に勉強する生徒が多く, 質素・勤勉が特徴。	生徒たちは自由な雰囲気の中で学校生活を楽しんでいる。しつけ教育は厳しい。受験を意識したカリキュラムは組んでいない。	行事, 部活動も活発で, 「文武両道」に優れた女子校。
カリキュラム(必修)			
1年次	国6数6外5社4理4 家2体3芸2特0	国5数5外7社4理5 家2芸1特1	国5数6外5社4理5 家2体3芸2特0
2年次	国5数3外6社5理3 家0.5体3芸0特0.5	国5数3外6社3理0 家2体3芸1特1	国5数5外5社4理5 家2体4芸2特0
3年次	国2数0外6社0理0 家0体3芸0特0	国3数0外6社1理0 家0体4芸1特1	国3数0外6社0理0 家0体2芸0特0
進学状況表の特徴	国公立・私立, 医学系・薬学系を区分	国公立・私立, 私立共学大・私立女子大, 医学系・薬学系・芸術系を区分	国立・公立・私立を区分

出典：各校の学校要覧および受験案内

※1：A 高校, B 高校は大都市圏の中学受験を対象とした有名進学塾提供の偏差値。C 高校は都道府県レベルの標準偏差値。従って, A 高校・B 高校と C 高校を比較することはできない。

※2：1992年3月の進学状況。浪人生を含む。

を言う。このことから、チャーターもまた、「資源（生徒）を条件づけるもの」の一つと考えられ、指標に加えた。

次に、具体的に伝達されている知識内容を推察するため、各校のカリキュラム表と進学状況表を分析した。

a. チャーター

チャーターとは、①過去の卒業生が示してきた卒業後の進路、②卒業生の進路について社会一般の持っている印象、信念、③ある学校の生徒は特定の進路に向かっても当然であるという正当性、の三つから構成される（丸山 1981）。ここでは受験案内の記載をチャーターの指標とする。

①A 高校のチャーターは、「将来の自立を意識した」「医師、弁護士、国家公務員、研究者」など職業的役割遂行者の形成にある。

②B 高校のチャーターは「良き妻、良き母」という伝統的に女性に期待されてきた妻役割・母役割の遂行者の形成にある。

b. イデオロギー

イデオロギーの指標には、教育基本方針と各校が記載する卒業生の進路を指標とする。

①A 高校のイデオロギーは「気品と学識、自主性を備えた女性の育成」、「各方面に有能な女子を送り出すこと」にある。

②B 高校のイデオロギーは「真の知性を養って正しい価値判断のできる」、「堅実な中流家庭婦人」の育成にある。

c. 学校史

①A 高校の設立目的は「女子教育機関の不足を整備し振興する」ことにある。

②B 高校の設立目的は「布教と教育慈善」にある。

d. カリキュラム

①A 高校は家庭科の必修時間が少ない（合計2.5時間）。（B 高校は4時間）

②B 高校はノン・アカデミック科目（家庭科・体育科・芸術科・特別活動）の必修時間が多く（合計19時間）、3年次にも6時間が必修となっている。（A 高校はそれぞれ14時間、3時間）

e. 卒業生の進学状況表

①A 高校では医学系、薬学系を区別した分類がなされている。

②B 高校では医学系、薬学系、芸術系に加え、私立共学大と私立女子大を区別した分類がなされている。

以上、両校の文脈変数（チャーター、イデオロギー、学校史）を比較すると、A高校とB高校において伝達される性役割観と進路に関する知識内容は一貫して対照的であることが分かる。文脈変数から浮かび上がる両校の学校組織の特徴を簡潔にまとめると、A高校は「専門的職業婦人の養成校」、「非伝統的性役割観⁽⁶⁾の伝達機関」、B高校は「良妻賢母の養成校」「伝統的性役割観の伝達機関」という相反するものとなる。

さらに、カリキュラムと卒業生の進学状況表の特徴からは、以下の可能性を示唆できる。

まず、A高校は家庭科の時間数が他校に比べ少ないことから、「女性の役割は家庭内での仕事にある」というメッセージ伝達が相対的に少ない。これは、家庭科が、伝統的に女子に期待されてきた役割への社会化を促進するという指摘を幾度となく受けてきた科目であることから推測される。

次に、ノン・アカデミックな科目が重視されるB高校では、教養主義的な女子教育の実践がうかがわれる。また、卒業生の進学状況表の特徴から、B高校内に女子大に特別な意味を付与する文化が存在することが推測される。ところで、中山（1985）によると、伝統的に「女子にふさわしい教育レベル」には、適度なアカデミック・レベルであるだけでなく、「女子校」であることも含まれるという。共学大と女子大の区分は、女子にふさわしい教育機関として女子大を捉える文化の存在を示唆する⁽⁷⁾。

カリキュラム表、卒業生の進学状況表から推測される両校の知識伝達内容は、文脈変数の分析から得た知見を補強する。全体としてA高校は「専門的職業婦人」養成のための、B高校は「良妻賢母・教養婦人」養成のための知識伝達に特徴を見出すことができる。

(2) 性役割の社会化の結果～性役割観に見られる学校差

これまでは、性役割観に関して学校が発するメッセージを分析した。以降は、メッセージを受け取る側の生徒に視点を移す。現在各校の生徒が内面化している性役割観からは、各校で行われた性役割の社会化結果を予測できる。以下では質問紙調査の回答を分析し⁽⁸⁾、生徒の内面化している性役割観の学校差を明らかにする。指標として用いた質問項目は、主として「理想の女性像」⁽⁹⁾と「結婚後希望する夫婦分業形態」⁽¹⁰⁾である。

a. 理想の女性像

① 「家族にかこまれ幸せな家庭生活を送る女性」を理想とする者は、B高校では半

数以上を占める (57.2%) が、A 高校では 3 割 (30.0%) である。

($\chi^2=24.73$ $p<0.001$)⁽¹¹⁾

- ② 「男性に依存しない自立した女性」を理想とする者は、A 高校に多く (28.7%)、B 高校に少ない (15.9%)。($\chi^2=7.17$ $p=0.03$)

b. 結婚後の夫婦分業形態

- ① 伝統的に妻の役割とされてきた「料理・洗濯・掃除」を「自分(妻)主体で行う」とした者は A 高校では 4 割に満たない (38.0%) が、B 高校では 7 割以上 (72.4%) である。($\chi^2=43.33$ $p<0.001$)

- ② 伝統的に夫の役割とされてきた「収入を得る」を「夫主体で行う」とした者は、A 高校では 4 割に満たない (38.7%) が、B 高校では 7 割以上 (71.8%) である。($\chi^2=35.29$ $p<0.001$)

以上の知見から、生徒の内面化している性役割観に学校差があることが明らかである。A 高校の生徒は男女に同様の特性を期待する傾向が強く⁽¹²⁾、「夫は仕事、妻は家庭」という伝統的な性役割観、性別役割分業観を否定する者が多い。反対に、B 高校の生徒は男女に異なる特性を期待する傾向が強く、伝統的な性役割観、性別役割分業観を肯定するものが多い。

さらに重要なことに、生徒の内面化している性役割観は、学校が伝達する性役割観の特徴と一致している。専門的職業婦人の養成校という特徴を持つ A 高校の生徒は、非伝統的な性役割観を内面化する傾向にあり、良妻賢母養成校という特徴を持つ B 高校の生徒は、伝統的な性役割観を内面化している。

(3) 性役割観に基づく進路分化～進路展望に見られる学校差

ここでは、生徒の進路展望の学校差を示す。異なる性役割観が伝達される学校において、いかなる進路分化パターンが見られるかを検討することがその目的である。なお、ここでいう「進路」とは、高校卒業直後の選択のみを指すものではなく、より広く、就職、結婚を含めたライフコース⁽¹³⁾の選択を指すものとする。妻役割・母役割と職業的役割の間で絶えず揺れ動く(天野 1980)女性の進路選択パターンをより現実に近い形で捉えるためである。以下では、1) 高校卒業後と 2) 就職・結婚後の進路展望に見られる学校差を明らかにする。

1) 高校卒業後

A 高校、B 高校ともに、4 年制大学進学希望率は 9 割を越えており (A 高校99.4%、B 高校97.3%)、学校差はない。しかし、志望分野には次の差異が見られた。

- ① A 高校は、医学部志望者が多い (29.5%)。(B 高校は7.1%)
 ② B 高校は人文科学系⁽¹⁴⁾志望者が多い (35.4%)。(A 高校は19.5%)

$$(\chi^2=89.41 \quad p<0.001)$$

医学部は、将来専門的職業の遂行を可能とし、女性の占める割合が低い⁽¹⁵⁾ことから従来「女性向きでない」とされてきた分野である。これに対して、人文科学系は、女子学生の占有率が高く、「女性向き」とされる分野である。両校の違いは、同じ4年制大学とはいえ、「女性向き」の進路を選択するか (B 高校)、そうでないか (A 高校)にある。

なお、両校の生徒は大学教育に対する意義づけも異なっており、A 高校は B 高校に比べ大学と将来希望する職業との関連を重視している生徒が多かった⁽¹⁶⁾。A 高校の生徒は将来の職業について明確な志望を持つ者が多く、将来の職業と高校卒業後の進路を関係づけて選択しているのである。対して B 高校の生徒は、大学と将来の職業との関係が必ずしも明確ではない。

2) 就職・結婚後

A, B 両校の生徒の大多数は将来4年制大学卒の学歴を獲得する。だが、4年制大学を卒業した女子がたどる進路は必ずしも一様ではない。以下では「就業意欲および職業継続意識」と「結婚後の家庭と仕事の両立形態」を主たる指標とし、大学卒業後の進路にみられる学校差を明らかにする。

a. 就業意欲、職業継続意識 (表2)

- ① A 高校は、定年までの継続就業希望者が半数近く (47.3%) に達し、短期就業希望者 (「就業希望なし」+「結婚まで (働く)」+「出産まで (働く)」) はわずかである (7.4%)。
 ② B 高校には、中断再就職希望者が多い (44.8%)。また、他校より短期就業希望者が多く、定年までの継続就業希望者が少ない。

表2 就業意欲、職業継続意識 (％)

(N)	A 高校 (150)	B 高校 (145)	C 高校 (143)
就業希望なし+結婚まで+出産まで	7.4	23.4	16.8
中断再就職	36.0	44.8	33.6
定年まで継続	47.3	24.1	42.7

$$\chi^2=26.53 \quad p<0.001 \quad (\text{無回答は表記省略})$$

※「仕事をいつまで続けたいと思いますか」に対する回答。選択肢は「結婚するまで」「子どもが生まれるまで (出産まで)」「一度やめるが子どもが大きくなったらまた始める (中断再就職)」「定年まで」「仕事には就きたくない (就業希望なし)」「その他」の六つ。

表3 家庭と仕事の両立形態 (％)

(N)	A 高校 (150)	B 高校 (145)	C 高校 (143)
育児優先型	12.7	31.7	18.2
家庭優先・両立型	30.7	40.0	39.2
仕事優先・両立型	18.0	13.1	11.9
職業型	38.0	14.5	28.4

$\chi^2=32.92$ $p<0.001$ (無回答は表記省略)

※育児優先型：子どもがいたら仕事しない。家庭優先・両立型：子どもがいても、家庭優先で仕事をする。仕事優先・両立型：子どもがいても職業優先で仕事をする。職業型：子どもがいても職業優先で仕事をする。結婚はしなくてもいい。

b. 家庭と仕事の両立形態⁽¹⁷⁾ (表3)

- ① A 高校には職業型(「子どもがいても、職業優先で仕事をする。結婚はしなくてもいい」)が最も多く(38.0%)、育児優先型(「子どもがいたら仕事はしない」)が最も少ない(12.7%)。
- ② B 高校には家庭優先・両立型(「子どもがいても家庭優先で仕事をする」)が最も多い(38.0%)。加えて、他校より育児優先型が多い(31.7%)。

就職・結婚後の進路選択パターンには顕著な学校差が見られた(表2)。就業・職業継続については、A 高校には定年までの継続就業を想定する者が多く、B 高校には結婚あるいは出産を機に一度は退職することを想定する者が多い。ただし、定年までの継続就職をもって即、妻役割・母役割の放棄とみなすことはできない。職業的役割と妻役割・母役割との葛藤場面に遭遇したとき、どちらをどの程度優先するか。その指標となるのが家庭と仕事の両立形態の希望である。

両立形態については、A 高校が職業的役割を優先する傾向にあり、B 高校が結婚、育児、家庭を優先する傾向にある(表3)。同様の傾向は結婚希望にも表れており、結婚について消極的な回答(「したくない」、「どちらでもいい」、「わからない」)をした者は、B 高校ではわずか22.0%であるのに対し、A 高校では40.7%にのぼった。また、他の質問項目(希望する職業)からは、A 高校の生徒は、医師(24.7%)、大学教授・研究職(17.3%)等、威信が高く、配偶者の地位に頼らずして自身の地位を確保できる職業を希望するものが多いことが明らかになった⁽¹⁸⁾。大学選択時点から職業志望が明確であった A 高校の生徒は、一貫して職業的役割への志向を持つのである⁽¹⁹⁾。

ところで、そもそも A 高校は専門的職業婦人の養成校、B 高校は良妻賢母の養成校という特徴を持つ高校であった。生徒がいかなる進路へと導かれるかは、学校の伝達する性役割観ならびに将来像と関連があることが分かる。

以上、学校組織の特徴、生徒の内面化する性役割観、進路展望の三つに関して A 高校と B 高校の比較を行った。分析結果から、いずれの高校においても性役割の社会化が効果的に行われていること、学校の伝達する性役割観に基づく進路分化メカニズムが存在することを推測できる。さらに、以上の知見は、高等学校が、学業成績のみならず、特定の性役割観に基づくトラックを形成していることを示唆するものである。この点については以下で詳しく考察する。

(4) 性役割観に基づく進路の「矯正力」

これまでの知見は、高等学校が性役割観に基づくトラッキング・システムを形成している可能性を示唆するものであった。しかし、これまでみてきた学校組織、生徒の内面化する性役割観、進路展望の相関関係は、予め各校に特定かつ同質の性役割観、進路展望を持つ生徒が入学した場合にも起こりうる。これまでの知見だけでは、①入学以前から生徒に影響を与え続けている家庭の社会化の結果／それに伴う進路分化と、②学校における社会化の結果／進路の分化を分離することはできない。従来のトラッキング研究は、「特定の学校に入学したことが、特定の進路へと水路づけられることになる」トラッキング機能、すなわち、学校独自の進路矯正力の存在を明らかにした。最後に、性役割観に関しても、学校は同様の矯正力を持つことを実証しよう。

トラッキング・システムには二つの特徴がある。第一に、各トラックは、そのトラックに適合的な生徒を入学させ、トラックと適合的な進路へと導く。第二に、より重要なことであるが、仮にそのトラックとは非適合的な生徒が入学した場合、生徒はトラックに適合的な進路へと水路づけられる。学校の持つ進路の矯正力を明らかにするためには、とりわけ第二の特徴の検討が必要となる。

学校の持つ進路の矯正力、すなわち、性役割観に基づくトラッキング機能の存在を明らかにするために、生徒が各校に入学した後、その内面化する性役割観がどう変容したかを考察する。入学前、個々人が内面化していた性役割観を知るために、ここでは家庭においていかなる性役割への社会化を経験したかを指標とする。家庭は性役割の社会化エージェントの一つであり、とりわけ、少年期に重要な社会化エージェントは両親である (Ireson 1978) と言われる。ゆえに、入学以前、生徒が内面化していた性役割観は、家庭における性役割の社会化経験をかなりの程度反映していると考えられる。

家庭における性役割の社会化パターンは、「職業志向型」と「職業非志向型」の二つに分類した。「職業志向型」は家庭において「生涯続けられる仕事につきなさい」とい

表4 学校別、家庭での性役割の社会化経験 (%)

(N)	A 高校 (150)	B 高校 (145)	C 高校 (143)
職業志向型	66.7	42.8	58.1
職業非志向型	33.3	57.2	39.9

$\chi^2=17.87$ $p<0.001$ (無回答は表記省略)

※「あなたはこれまで、ご両親に次のようなことを言われたことがありますか。：生涯続けられる仕事につきなさい」に対する回答。「よくある」「たまにある」と回答した者を「職業志向型」、「ない」と回答したものを「職業非志向型」と分類。

うメッセージを伝達された経験のある場合を指し、「職業非志向型」はその経験がない場合をいう。それぞれの社会化経験を持つものの比率を学校別に示したものが表4である。

トラッキング・システムの第一の特徴は「各トラックは、そのトラックに適合的な生徒を入学させ、トラックと適合的な進路へと導く」ことであった。性役割観に関しても、この特徴はあてはまる。表4から明らかなように、A高校には「職業志向型」、B高校には「職業非志向型」の社会化経験を持つ者が多い。

では、家庭での性役割の社会化経験いかにかわらず、学校には特定の進路への「矯正力」が存在するだろうか。次に、「仮にそのトラックとは非適合的な生徒が入学した場合、生徒はトラックに適合的な進路へと水路づけられる」というトラッキング・システムの第二の特徴の存在について論じよう。

A高校、B高校ともに、性役割観に基づくトラックに非適合的な性役割の社会化経験を持つ者(A高校にとっては「職業非志向型」(33.3%)、B高校にとっては「職業志向型」(42.8%))が一定数存在している。トラックに非適合的な社会化経験を持つ生徒が、現在いかなる進路展望(結婚後の家庭と仕事の両立形態)を形成しているかを示したものが表5、表6である。

表5 「職業志向型」の社会化経験者の学校別進路展望 (%)

(N)	A 高校 (99)	B 高校 (61)	C 高校 (82)
育児優先型	7.1	23.0	11.0
家庭優先・両立型	30.3	41.0	43.9
仕事優先・両立型	22.2	19.7	15.9
職業型	40.4	16.4	29.3

$\chi^2=15.58$ $p=0.001$ (C高校を除いて検定)

表6 「職業非志向型」の社会化経験者の学校別進路展望 (%)

(N)	A 高校 (50)	B 高校 (83)	C 高校 (56)
育児優先型	24.0	38.6	30.4
家庭優先・両立型	32.0	39.8	33.9
仕事優先・両立型	10.0	8.4	7.1
職業型	34.0	13.3	28.6

$\chi^2=8.97$ $p=0.03$ (C高校を除いて検定)

仮に家庭での社会化経験のみが進路選択に影響するならば、家庭で「職業志向型」の性役割の社会化を経験した者は、職業をより優先する「職業型」あるいは「仕事優先・両立型」の進路展望を形成すると予想できる。しかし実際には B 高校生徒のわずか 16.4% が「職業型」を、19.7% が「仕事優先・両立型」を選択しているにすぎない (A 高校ではそれぞれ 40.4%, 22.2%)。彼女たちの多くは「育児優先型」(23.0%), 「家庭優先・両立型」(41.0%) を選択している。このことは、B 高校内に育児あるいは家庭を優先する進路 (ライフコース) への矯正力が存在していることを意味する。

同様の「矯正力」は、A 高校にも存在する。家庭からの影響のみを受けて進路が選択されるなら、「職業非志向型」の社会化経験者が職業志向を持つことは少ないはずである。しかし A 高校における「職業非志向型」社会化経験者は、34.0% が「職業型」の、10.0% が「仕事優先・両立型」のライフコースを志向しており、あわせて 44.0% にのぼる者が、職業をより優先する進路を選択している (B 高校では「職業型」「仕事優先・両立型」あわせても 21.7% にすぎない)。このことから、A 高校内に職業を優先する進路 (ライフコース) への矯正力が存在することが分かる⁽²⁰⁾。

これらの知見は、いかなる生徒が入学してきても、学校が生徒を社会化・配分する方向は一定であることを示している。たとえば、家庭のメッセージと学校のメッセージが矛盾することがあっても、学校は強力な「矯正力」を発揮するのである。先に明らかにした学校組織、生徒の内面化する性役割観、進路展望の三つの関係は、単に家庭での社会化経験を反映した疑似的な相関関係ではなく、学校の持つ進路矯正力の存在を示しているに他ならない。これらの高等学校は、性役割観に基づくトラックを形成しており、そこには特定の性役割観、さらには特定の進路へと導くトラッキング・メカニズムが隠されているのである。

5. 考察

これまでの知見から、「高校は性役割観に基づく独自の進路分化メカニズムを有しており、性役割観に基づいて生徒の進路選択の機会と範囲を制約するトラッキング・システムを形成している」ことが実証された。性役割の社会化過程を異にするトラックのどこに入るかによって、生徒の卒業後の進路選択の機会と範囲は制約されるのである。その機会と範囲の制約は、現時点ではあくまでも進路展望あるいはアスピレーション・レベルのものである。しかし、B 高校では実際のライフコース選択場面において、女性向き職種、キャリアと結びつかない「行きづまり職 (dead-end jobs)」(天野 1988: 278) を結果的に選択しやすい状況が作られているのであり、将来的には進

路選択機会と範囲の客観的制約が作り出されるのである。

本稿が明らかにした性役割観に基づくトラッキングは「文化的に規定された性」,すなわちジェンダーに関わる進路分化メカニズムである。従って,それを生み出す構造は「ジェンダー・トラック」と呼ぶにふさわしい。これに対して従来の研究が扱ってきたトラッキングは学業成績に基づく進路分化メカニズムである。そのため,それを生み出す構造は「アカデミック・トラック」と呼ぶことができる。

本稿で明らかになったジェンダー・トラックとアカデミック・トラックの異同について議論しておこう。第一に,ジェンダー・トラックもアカデミック・トラックも同様に,生徒を特定の進路へと振り分ける機能を持つ。しかし,そこで何を用いるかは異なる。アカデミック・トラックが学業成績に基づいた選抜を行うのに対し,ジェンダー・トラックは性役割観に基づいた選抜を行う。第二に,どちらのメカニズムも,入学以前の予期的社会化並びに入学者のセレクション(そこには受験者による「選択」も含まれる)という入学以前の効果と,入学以後の社会化過程に伴う「水路づけ」すなわち入学以後の効果の,2段階選抜過程を持つ点では共通である。だが,アカデミック・トラックの選抜が各校の偏差値ランクの影響を受けるのに対し,ジェンダー・トラックのそれは各校のチャーターあるいは学校文化(特に女性役割に関する)の影響を受けるという違いがある。第三に,制度的障壁を生み出すアメリカのトラッキングとは異なり,両者とも,あくまで心理的な障壁(自己選抜)にすぎない(荻谷 1988)点は同様である。しかし,アカデミック・トラックが,同じ目標に対する異なったアスピレーション水準の序列であるのに対し,ジェンダー・トラックは,質的に異なる目標に対して方向づけられたアスピレーションの並列である点は異なる。

本稿の調査は事前に学業成績レベルを統制した上で行った。従って,以上で実証された「性役割観に基づく進路分化」は,学業成績を統制した後に生じた分化といえる。ジェンダー・トラックはアカデミック・トラックとは独立した進路配分構造である。アカデミック・トラックを「学業成績の差異が形成するトラック」とするならば,ジェンダー・トラックは「学校が伝達する性役割観の差異が形成するトラック」である。ジェンダー・トラックとアカデミック・トラックを図示したものが図1である。調査対象校はアカデミック・トラック上位の位置に左方(伝統的性役割観)から右方(非伝統的性役割観)に向かってB高校, C高校, A高校と並べることができる。3校のアカデミック・トラック上の位置は同じでも,ジェンダー・トラック上の位置は異なる。

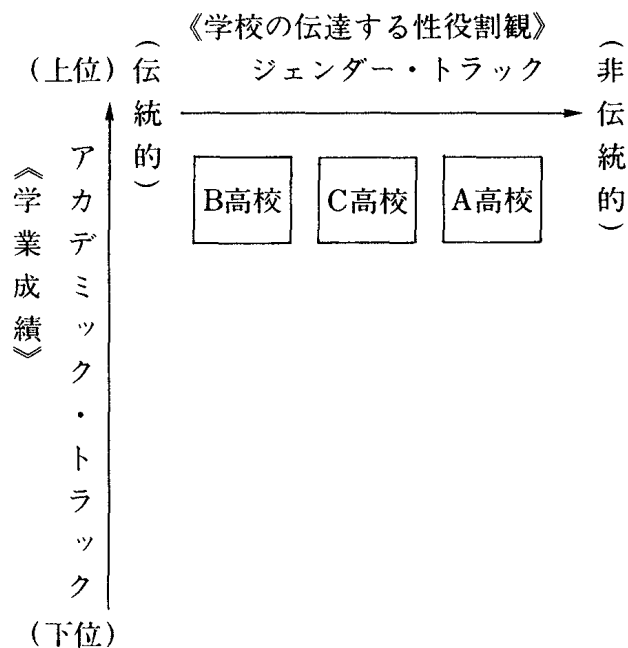


図1 ジェンダー・トラックとアカデミック・トラック

その後の進路選択の機会と範囲の制約を受ける。このことは、ライフコース選択に対し、いかなる性役割の社会化を行う学校に進学するかが重要であることを意味する。すでに見てきたように、性役割観に基づく進路分化メカニズムを生み出す構造であるジェンダー・トラックは、学業成績とは独立した「軸」を形成しており、学業成績が同レベルの者が選択する進路を分化させる⁽²¹⁾。

従来の研究は、もっぱらアカデミック・トラックによる進路分化を説明してきたにすぎない。それは一方の性である男子の進路分化には該当しても、非メリトクラティックな要因が介在する女子の進路分化は説明できない。学校内でメリトクラティックな選抜が行われているという知見は、それ自身 gender-biased にほかならない。

女子の4年制大学進学率が上昇しても、その内実が人文・教育・家政等、従来「女性向き」とされてきた特定分野への進学であることは常々指摘されてきた。このような、「性と専攻との『系』の存在、『領域』のかくれた持続(天野 1988:272)」は、ジェンダー・トラックの存在によって説明可能となる。人々の進路選択の機会と範囲はアカデミック・トラックとジェンダー・トラックの二重の制約を受けるのであり、性に応じて異なる進路(例えば専攻分野など)が「選択されやすい」現状を生む⁽²²⁾。

さて、全体社会を視野に入れた場合、ジェンダー・トラックの存在はいかなる意味を持つだろうか。まず、機能主義的な観点に立つと、性に基づく進路の分化と同様、内面化している性役割観に基づく進路分化は、真の能力に基づく競争を妨げる、人的

本稿で得られた知見は、日本の高等学校が、学業成績のみならず、性役割観に基づくトラッキング・システムを形成していることを意味する。長い間、学校はメリトクラティックな基準に基づく選抜機関であると考えられてきた。しかし、実際には性役割観に基づく生徒の分化・配分も行われているのであり、いかなる性役割の社会化を行う学校組織に入学するかによって、

ジェンダー・トラック

資源の浪費 (Duru-Bellat 1990) と見なすことができる。B 高校の生徒は、本来ならば可能な職業機会、能力の活用を制約されていると考えられる。だが、生徒の出身階層を視野に含むと、以下のような再生産論的観点に立つ議論も可能となる。

アカデミック・トラックが「出身階層→学校ランク→将来の地位」という社会的トラッキング・システムを形成しているように、ジェンダー・トラックもまた出身家庭とは無縁ではない。ただし、ジェンダー・トラックの場合、最も重要なのは母親の就業形態である。今回の調査では、フルタイムの仕事を持つ母親は A 高校に、専業主婦の母親は B 高校に多かった⁽²³⁾。フルタイム就業／専業主婦という対照性は、両校生徒の進路展望に見られる特徴と一致する。この知見は、ジェンダー・トラックもまた、「母親の就業形態→高校→将来の就業形態」という社会的トラッキング・システムを形成している可能性を示す。ジェンダー・トラックは女性の「ライフコース選択パターンの再生産システム」なのである。さらに、家庭内での女性の役割のありかたは、階層的特性を持つことも知られている (天野 1988, Duru-Bellat 1990 等)。この意味において、ジェンダー・トラックは、階層再生産のメカニズムの一端を担っているということもできる。

以上のような再生産論的観点に立つと、将来専業主婦となる女子に対する教育的投資も、決して浪費とはいえない。なぜなら、妻あるいは母親の教養は、管理職の夫あるいは子どもの教育に貢献するからである (Duru-Bellat 1990)。Duru-Bellat によると、特に「人文科学」系の普通教育が女子にとって最高の学校教育投資となるが、まさに、B 高校は A 高校に比べ人文科学系の進路を志望する生徒が多い学校であった。A 高校と B 高校の生徒の教育投資は全く別の意味の上に成り立っているのである。学校教育が女子に対して矛盾した二つのメッセージを送っていることは、これまでも指摘されてきたが (天野 1988, Duru-Bellat 1990 等)、A 高校はそのうち業績主義的な側面を、B 高校は (伝統的) 女性役割の再生産という側面を強調した学校なのである。

機能主義的観点に立とうとも、再生産論的観点に立とうとも、全体社会とジェンダー・トラックの関わりを考察することは、これまで検討してきた学校独自の進路分化機能を否定するものではない。上述したように、学校が性役割観に基づく進路の「矯正力」を持つこと、それによって家庭での性役割の社会化効果を「打ち消す」ことは、間違いない事実だからである。

本稿は、学校が性役割観に基づく進路配分装置であり、「ジェンダー・トラック」と

呼べるものを形成していることを明らかにした。しかし、多様な進路（トラック）が選択可能な中で、なぜある者は特定の進路（トラック）を選択し、他の者は別の進路（トラック）を選択するのか、という選択のダイナミズムについて本稿の議論は不十分なままである。チャーター、学校文化に基づいた学校「選択」は、それらが入学前から可視的なものであるゆえ、あたかも個人の主体的な「選択」を思わせるが、実は「構造的に規定された自己選別」なのである（Bourdieu 1970, Duru-Bellat 1990）。

人々の選択を規定する社会的な構造とは何か。本稿の知見は、ジェンダー・トラックの選択と母親の就業形態の関連を示唆するものであった。しかし、父親の学歴・職業に学校差が見られないことから、それは出身家庭の社会経済的地位（それはこれまで父親の学歴・職業を指標としてきた）とは別の階層分類と関わるものである。その一つとして文化資本の可能性が考えられるものの、トラックの選択を規定する構造についてのさらなる議論は、今後に残された課題である。

〈注〉

- (1) なお、元来 Rosenbaum が著書 *Making Inequality* の中で示したトラッキングの概念とは、あるコースの選択に伴い、後の進路選択機会が本人の気付かぬうちに閉ざされてしまう「制度的な障壁」をいうものであった。これに対して日本に輸入され、使用されているトラッキング概念は、機会の「制度的な障壁」を指すものではない。例えば、いわゆる偏差値ランク下位校や職業高校の生徒は、4年制大学への進学機会を「完全に」閉ざされているのではなく、高校3年間でそれに匹敵するだけの学力やアスピレーションを身につける機会を奪われているという意味で「機会を制約」されている。従って、日本では、制度的というよりも主観的に閉ざされた機会である。また、アメリカのトラッキング・システムには、アスピレーションを「だまして冷却する」クーリング・アウト機能が隠されているが、日本では、「だます」という含意はない。本稿では、日本的な意味においてトラッキングという語を使用する。
- (2) 最近、女子の性内分化を対象とした実証研究は、徐々にではあるが増えつつある（菊地他 1993, 宮崎 1993など）。しかし、これらの研究は女子生徒のサブカルチャーの多様性と社会化に焦点をあてたものであり、性役割に基づく学校の選抜・配分機能を議論したものではない。ただし、推論の域にとどまっているものの、菊地他（1993）では学校が女子のライフコース選択に少なからぬ影響を持つ可能性が示唆されている。

- (3) 本稿で使用するデータは、著者が修士論文研究において行った調査の結果得たものである。詳細については、拙著(1993)『ジェンダー・トラック——女子高校生の進路展望に関する実証的研究——』お茶の水女子大学大学院人文科学研究科平成4年度修士学位論文、を参照されたい。
- (4) A高校とB高校はいわゆる「6年制中高一貫校」である。
- (5) なお、質問紙回収率は全体で85.4%。うちわけは、A高校100.0%、B高校78.4%、C高校80.8%であった。その結果、各校からの質問紙回収数はA高校150部、B高校145部、C高校143部とほぼ同数となった。
- (6) 本稿における伝統的性役割観、非伝統的性役割観の定義は以下のとおりである。
 伝統的性役割観：妻役割・母役割の優先。性別役割分業観の肯定。
 非伝統的性役割観：職業的役割の優先。性別役割分業観の否定。
- (7) なお、データは省略するが、B高校は、現在の学校への入学理由として「女子校である」ことをあげたものが3校の中で最も多かったことを付け加えておく。
- (8) 以降の分析には東京大学大型計算機センターのSPSS^xを使用した。
- (9) 「あなたは大人になったらどのような女性になりたいですか」に対する回答(二つ選択)。選択肢は上記を含め計七つ。カイ二乗検定を行い、危険率5%未満で有意だった選択肢を分析。
- (10) 「あなたは結婚したら、次のことは夫婦でどのように分担したいと思いますか」に対する回答。5段階評価を3段階(妻主体、半分ずつ、夫主体)に再分類。
- (11) 以下では、表を示さない場合のみ本文中に χ^2 値を提示する。表を示す場合には、 χ^2 値は表に付し、本文中では省略する。
- (12) データの記載は省略するが、同様の傾向は自分の子どもに対する期待にも見られた。B高校の生徒はA高校の生徒に比べ、息子と娘に異なる特性を期待する傾向が強く、性に応じて異なる役割を期待する者が多かった。成人男女に期待する特性についても同様であった。すなわち、A高校の生徒は男女に同様の特性を期待するのに対し、B高校の生徒は異なる特性を期待するのである。
- (13) ライフコースとは、「それぞれのライフステージごとの就学、就職、結婚、退職といった規範的な出来事に基づく地位や役割の移行によって特徴づけられる人生の軌跡」(岩井 1990から重引)を示す。本稿では、ライフコースという語を「就学、就職、結婚といった出来事に基づく地位や役割の移行によって特徴づけられる人生の軌跡」という意味で使用する。
- (14) 文学、史学、哲学、語学、社会学、心理学、教育学、文化人類学、国際関係学を

指す。

- (15) 女性が占める割合は医学部23.2%，人文科学系は66.4%である。（『学校基本調査報告書（平成3年度）』）
- (16) 紙面上データは割愛するが，A高校には志望大学を決定する際，「将来希望する職業との関連」「研究指導が熱心である」ことを「とても重視」する者がB高校より多く，「大学で取った資格を使って将来働きたい」「大学院に進みたい」とする者も多かった。
- (17) 家庭と仕事の両立形態は複数の質問への回答を合成して作成した。その分類方法は以下のとおりである。

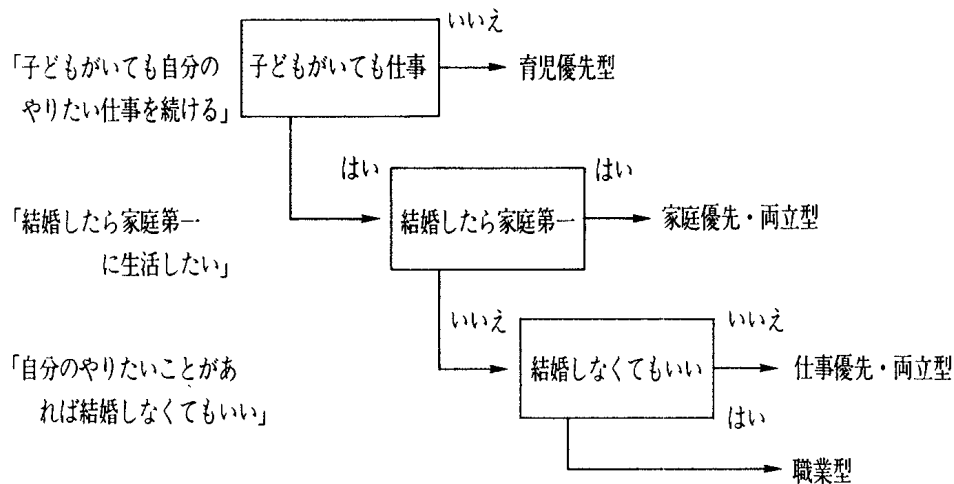


図 2

ただし、「両立型」は必ずしも定年までの継続就業を意味するわけではない。ちなみに、「家庭優先・両立型」に分類される者のうち、定年までの継続就業希望者は僅か24.4%である。

- (18) なお，B高校で希望者が最も多い職業はマスコミ関係（10.3%）であった。
- (19) なお，本稿の本筋を離れるが，ここでの知見は，中山（1985）が分類した女子の教育アスピレーション・パターンを実証するものである。中山は，女子の教育アスピレーションを純教養志向，配偶者地位志向，家庭生活志向，純職業志向に分類した。A高校に見られる教育アスピレーションは，まさに純職業志向であり，B高校のものは配偶者地位志向あるいは家庭生活志向であると考えられる。
- (20) なお，統計的検定にたえられるサンプル数に満たないため傍証にとどめるが，学校が特定の進路への矯正力を持つことは，以下の知見からも明らかである。

本文中に取り上げた，家庭における性役割の社会化カテゴリー（「職業志向型」）

「職業非志向型」)にさらに「女らしくしなさい」というメッセージの受容経験を加え、家庭での性役割の社会化経験を「しとやかな職業婦人型」,「男勝りの職業婦人型」,「専業主婦型」,「放任型」の四つに分類したところ(ネーミングにあたり,木村(1990)を参照した),本文同様,学校の持つ進路の矯正力の存在が確認できた。例えば「男勝りの職業婦人型」(「生涯続けられる仕事につきなさい」のみ両親に言われた経験あり)の社会化経験者もB高校に進学すると,わずか19.2%が「職業優先型」の進路展望を形成するにすぎない(A高校では40.0%) [$\chi^2=6.88$ $p=0.08$]。また,「しとやかな職業婦人型」(「生涯続けられる仕事につきなさい」と「女らしくしなさい」双方を両親に言われた経験あり)の社会化経験者で「職業優先型」の進路展望を持つものは,B高校では13.9%にすぎず,40.4%が「職業優先型」を選択したA高校とは対照的である [$\chi^2=9.02$ $p=0.03$]。さらに,「放任型」(双方ともに言及なし)の社会化経験者はA高校では45.5%が「職業優先型」を,B高校

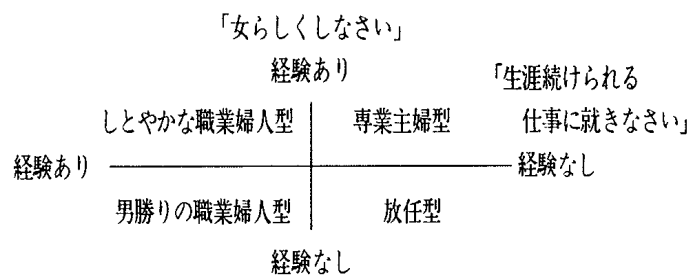


図3 家庭での社会化経験の分類枠組み

表7 学校別家庭での社会化経験 (%)

(N)	A 高校 150	B 高校 145	C 高校 143
しとやかな職業婦人型	34.7	24.8	34.3
男勝りの職業婦人型	31.3	17.9	23.8
専業主婦型	18.7	25.5	16.8
放任型	14.7	31.7	23.1

$\chi^2=20.52$ $p=0.002$

では37.0%が「育児優先型」を選択している [$\chi^2=11.32$ $p=0.01$]。なお,「専業主婦型」(「女らしくしなさい」のみ両親に言われた経験あり)は統計的に有意な学校差があらわれなかったものの,順当な「育児優先型」を選択したものはB高校40.5%に対しA高校28.6%にすぎなかった。以上は本文中の知見をより強固なものにする(以上,有意差はC高校を除いて検定)。

(2) もっとも,アカデミック・トラック上位校と下位校においてジェンダー・トラッ

クすなわち性役割観が及ぼす作用は異なることも予想される。しかし、いずれにしてもジェンダー・トラックが同レベルの成績の者を性役割観に基づいて分化させるメカニズムであることはかわりない。アカデミック・トラック中位校あるいは下位校において性役割観が生徒の進路にいかなる影響を与えるかは今後の研究課題である。

- (22) ジェンダー・トラックの制約を受けるのは女子に限らない。男子にとってのジェンダー・トラックもまた存在し、それは伝統的男性役割である「職業的役割」を選択する者とそうでない者とを分化させると仮説することができる。これまで男子には「一様に」職業的役割が期待されてきたことが、男子におけるジェンダー・トラックの存在を見えにくくしていたものと思われる。
- (23) フルタイム就業者は A 高校 23.3%, B 高校 9.0% であり、専業主婦は A 高校 40.0%, B 高校 49.0% であった [$\chi^2=16.01$, $p=0.003$]。なお、両校ともに、父親の 4 年制大学卒業率は 9 割を、専門・管理職に従事する者は 8 割を越えており、出身家庭の社会経済的地位の差はほとんど認められない。

〈引用・参考文献〉

- 天野郁夫 1983, 「教育の地位表示機能について」, 『教育社会学研究』第 38 集, pp. 44～49。
- 天野正子 1980, 「女性にとっての青年期とその進路選択」, 山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』, 有斐閣, pp. 130～156。
- 1986, 『女子高等教育の座標』, 垣内出版。
- 1988, 「『性と教育』研究の現代的課題」, 『社会学評論』155号, pp. 266～283。
- 1989, 「『ジェンダーと教育』研究の動向と課題」, 『日本教育社会学会第 41 回大会要旨集録』, pp. 244～245。
- Bourdieu, P. & Passeron, J. C. 1970, 宮島喬訳『再生産』, 藤原書店, 1991。
- 大都市学参 1992, 『大都市圏私立中学・高校受験ガイド THE 私立』。
- Duru-Bellat, M. 1990, 中野知律訳『娘の学校』, 藤原書店, 1993。
- 藤田英典 1980, 「進路選択のメカニズム」, 山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』, 有斐閣, pp. 105～129。
- 学習研究社 1992, 『大学進学で選ぶ 平成 5 年度私立中学受験案内』。
- I 進学院 1992, 『93年度入試用 大都市圏私立国立中学受験ガイド』。

- I 進学院 1992, 『93年度入試用 C 県大都市圏高校受験ガイド』。
- Ireson, C. 1978, "Girls' Socialization for Work", Stromberg, A. H. & Harkess, S.eds., *Women Working*, Mayfield Publishing Co., pp.176~200.
- 石戸教嗣 1982a, 「男女差からみた『かくれたカリキュラム』」, 京都大学教育社会学研究室『「学習風土」と「かくれたカリキュラム」に関する教育社会学的研究』No. 1, pp.35~41。
- 1982b, 「高校における『知識の配分と社会化』」, 『京都大学教育学部紀要』第28号, pp.143~162。
- 1985, 「学校組織の社会的機能」, 柴野昌山編『教育社会学を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp.111~127。
- 岩井八郎 1990, 「高度成長期以降の学歴とライフコース」, 『教育社会学研究』第46集, pp.71~95。
- 梶田孝道 1981, 「業績主義社会の中の属性主義」, 『社会学評論』127, pp.70~87。
- Karabel, J. & Halsey, A. H. 1979, 潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳『教育と社会変動』, 東京大学出版会, 1980。
- 荻谷剛彦 1981, 「学校組織の存立メカニズムに関する研究」, 『教育社会学研究』第36集, pp.63~73。
- 1983, 「学校格差と生徒の進路形成」, 岩木秀夫・耳塚寛明編『現代のエスプリ・高校生』, 至文堂, pp.69~73。
- 1985, 「高等学校の階層構造と教育選抜のメカニズム」, 『高等教育研究所紀要』第4号, pp.11~28。
- 1988, 「日本の高校再考—学校格差とトラッキング」, 『IDE』295号, pp.5~13。
- 経済企画庁 1992, 『平成4年度国民生活白書』。
- 菊地栄治・加藤隆雄・越智康詞・吉原恵子 1993, 「女子学生文化の現代的位相」, 『東京大学教育学部紀要』第32巻, pp.119~146。
- 木村涼子 1990, 「ジェンダーと学校文化」, 長尾彰夫・池田寛編『学校文化』, 東信堂, pp.147~170。
- King, R. 1973, *School Organization and Pupil Involvement*, Routledge & Kegan Paul.
- 丸山文裕 1981, 「大学生の職業企業選択に関する一考察」, 『教育社会学研究』第36

- 集, pp. 101~111。
- Meyer, J. 1977, "The effects of education as an institution", *American Journal of Sociology* 83—1, pp. 55~77.
- 耳塚寛明 1980, 「生徒文化の分化に関する研究」, 『教育社会学研究』第35集, pp. 111~122。
- 1982, 「学校組織と生徒文化・進路形成」, 『教育社会学研究』第37集, pp. 218~226。
- 1985, 「高校生」, 岩木秀夫・耳塚寛明編『現代のエスプリ・高校生』, 至文堂, pp. 5~24。
- 宮島喬・田中佑子 1983, 「女子高校生の進学条件と家族的諸条件」, お茶の水女子大学女性文化資料館『お茶の水女子大学女性文化資料館報』第5号, pp. 41~59。
- 宮崎あゆみ 1993, 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス」, 『教育社会学研究』第52集, pp. 157~177。
- 文部省 1992, 『平成3年度 学校基本調査報告書』。
- 中山慶子 1985, 「女性の職業アスピレーション」, 『教育社会学研究』第40集, pp. 65~86。
- Rosenbaum, J. E. 1976, *Making Inequality*, John Wiley & Sons, Inc.
- 竹内 洋 1988, 『選抜社会』, メディアファクトリー。
- Weitzman, L. J. 1979, *Sex Role Socialization*, Mayfield Publishing Co.

注) 高校名が特定できないように, 上記中の受験案内は必要に応じて名称を変えてある。名称を変更したものには下線を付した。